

の漁業に出漁した方がよいと言う漁業者は多い。しかし、400円の単価を維持することができるのは、図7から分かるように、9月以降の盛漁期においてはせいぜい200kg程度の搬入量であって、それ以上になると価格は350円程度となり、350~400kg以上の日には、もし漁協の買支えがなければ、価格は300円以下になると思われる。従って、久米島漁協セリ市場における盛漁期のトビイカ需要量は、漁業者の希望価格400円の場合には10人の漁獲する量でも余る量であり、希望価格を350円に下げても20人の漁獲量で余ってしまう量である。このことからすると、久米島における昭和56年のトビイカ釣り漁業は需要量によって制限されており、大部分の漁業者にとって魅力あるものとはなっていない。

⑩ トビイカの需要量

久米島におけるトビイカ需要は、地域住民による自家消費と加工業者の加工原料に限られ、島外移出はほとんど行われていない。自家消費はイカ汁やいためものなどの惣菜用と家庭用の塩辛加工品に利用される。加工業者の手に渡ったトビイカは、観光客のみやげ用として塩辛製品に加工される。前に述べたように8月から9月にかけて需要が大きいのは、地域住民の「初もの」に対する嗜好性が強いことと、観光シーズンであるために加工原料としての需要が多いことによるものであろう。

漁協のセリ市場における需要量についてはすでに述べた。漁協へのトビイカ搬入率は漁獲量の約30%と考えられることから、久米島全体の需要量は搬入量のはぼ3倍と考えることができる。従って、9月以降における1日の需要量は、単価400円では約600kg、350円程度の場合には約1,000kgで、これ以上の漁獲がある場合には漁獲物の処分にも困るような状態となり、漁協による買取りに依存しなければならなくなる。

この試算は、セリ開設日数が1カ月間に14~22日(表8)の場合のセリ市場における需要量を基礎にしており、いわば30日間の需要量を14~22日で供給する場合の1供給日当りの需要量であって、これだけの需要が連続して毎日ある訳ではない。

ここで漁業者の1カ月間のトビイカ釣り出漁日数を14~22日とし、1出漁日当りの平均漁獲量を25kgとすると、久米島における盛漁期のトビイカ釣り漁業者の許容人数は、上記の試算需要量から、希望価格を400円とすれば24人、350円程度とすれば40人と計算される。

⑪ 漁協による買取り販売

すでに述べたように、漁協セリ市場へ搬入されるトビイカが多すぎる日には漁協の買取りによる価格保持が行われている。図7から分るように、漁協による買取りは8月に2回、9月に5回、10月に5回行われた。350kg以上の搬入になると、ほとんどの場合に漁協の買取りが必要となることが図7から分かる。

表12は漁協によるトビイカの買取り状況を示したものである。

漁協が買い取ったトビイカは漁協の10トン冷凍庫で-20℃に保管され、昭和56年9月から昭和57年1月にかけて島内需要に応じて少しずつ販売された。総売上げ金額は1,239,539円